

The Gallery voice

NO-26

編集・発行／画廊沖繩〒901-1114 沖縄県南風原町神里373 TEL / FAX(098)888-6117 / 2006.9.16

なぜ、いま草間彌生か

上原誠勇

私が画廊を開いた80年代初め、日本美術業界は戦後の右肩上がりの経済力に支えられ、現在では信じられない程の活況があった。業界専門誌のデータによると、89年のピーク時の国内美術業界の取引高は8000億円とも言われ、SONYやTOYOTAなど大手の異業界が美術業界へ参入していた。美術業界は印象派もどきの現役作家の作品から巨匠のピカソやミロ、シャガール、の版画など、フランスで制作された近代美術の石版画や銅版画を大量に輸入し、中流意識に支えられた日本社会の生活者のニーズを満たした。一方で現代美術ファン向けに本場アメリカからウォーホルやサムフランシス、リキテンシュタインらのポップアートが大量に持ち込まれた。

当時を振り返れば、バブル経済社会の突風をまともに受けた美術界の異変だったかもしれない。また、過剰な欧米美術品の輸入は明治の近代化に始まる「西洋への憧れ」と言う日本人一般の内面奥深く刷り込まれた「西洋コンプレックス」の総決算的なしごく当然な社会現象だったとも言えないだろうか。更にまた戦後は「アメリカンイズム」が衣食や生活スタイルまで社会現象として反映され、特に美術に於いてはニューヨークの現代美術が世界各地の美術界を席卷し、世界の美術史に大きな影響を与えたのもその一因だろう。10数年前に東京都現代美術館がリキテンシュタインの作品「泣く女」を6億円購入した。マンガの様な絵を法外な高額で買うとは何事かと都議会が大いにもめた事があった。記憶している方もあるのではないだろうか。しかし、1990年以降のバブル経済崩壊後は日本一般社会同様に美術界とそのマーケットも崖から落ちるが如く激変した。ものが売れない、デフレ、リストラ、倒産、失業、自殺、ホームレス、日本の歴史的「闇」の時代に入った。当然「絵」も売れない時代に入っていった。

前述の時代背景にあって、1993年草間彌生はヴェネツィア・ビエンナーレの日本代表に選ばれ、世界的な再評価がされる。更に、1996年ニューヨークで個展「最高画廊展賞」を受賞しブレイクする。

90年代半ばに入ると、理屈抜きに「かわいい」と思わず口に出してしまいそうな草間彌生作品が若い世代から注目が集まるようになった。代表的な「かぼちゃ」シリーズを初め、ハイヒール、帽子、花かご、ハンドバッグ、など生活周辺の身近にある物が素朴で丁寧に描かれ、力強い生命感が漂い、その背

後に執拗に反復する偏執狂的な「無限のネット」が描写されている。それらの作品は10年ほど社会状況とタイムスリップして世間に浮上したかの様であった。草間の奇異と素朴と女性的なおしゃれ感覚にあふれた画面は、長い闇のトンネルのような日本社会の状況において、「解放される心」と共鳴したと言える。草間は現在77才、まるで「ガングロおばさん」的な出で立ちで自作の作品世界に溶け込んでいる。

1998年ニューヨーク近代美術館(MOMA)を初め米国の主要な美術館、東京都現代美術館巡回する大規模な個展が開かれると、日本の草間から世界のKUSAMAへと大ブレイクした。今では草間のオリジナルや版画を手に入れるのも難しくなった。



「ハンドバッグ」1985年作品

1957年の渡米、現代美術本場ニューヨークでの本格的な活動。「反復する 水玉」、「無限の網」をベースに、大作のキャンバスやインスタレーション、反戦運動、ボディペインティング、ハプニング、小説も書き、映画も創るなど「東洋の奇才美術家」と知られる。1975年帰国し、ファッションデザイナーや写真家とのコラボレーションなど多彩な才能を発揮、79年から版画も制作しその活動範囲が広く話題は豊富である。現在草間は、世界各地で活発に個展を展開している。今秋、日本美術協会から第18回高松宮記念世界文化賞を受賞した。東洋の奇才美術家、KUSAMAが、これから先どのような未来世界へ案内してくれるのか、まさに「INFINITY」の世界である。

(画廊主:うえはら せいゆう)

草間彌生公式サイト / www.yayoi-kusama.jp